伊勢物語

東下り　―　現代語訳　―

昔、ある男がいた。その男は、我が身を必要のない人間と思い込んで、都にはいるまい、東国の方に住むのによい国を探しに（行こう）と考えて出かけて行った。以前から友としている人、一人二人とともに行った。道を知っている人もいなくて、迷いながら行った。三河の国の八橋という所に着いた。そこを八橋といったのは、水の流れる川が蜘蛛の足のように（幾筋にも）分かれているので、橋を八つ渡してあることによって、八橋というのであった。その沢のほとりの木の陰に（馬から）下りて座って、乾飯を食べた。その沢に、かきつばたがとても美しく咲いている。それを見て、ある人が言うことには、「かきつばた、という五文字を和歌の各句の頭に置いて、旅の心を詠め。」と言ったので、（男が）詠んだ（歌）。

から衣…衣服が着ているうちに褻れるように、馴れ親しんだ妻が（都に残って）いるので、

はるかに遠くまでやって来た旅をしみじみと思うことだ。

と詠んだので、皆、乾飯の上に涙を落として、（乾飯が、水にもどす必要のないほどに）ふやけてしまった。

どんどん進んで行って、駿河の国に着いた。宇津の山に着いて、自分が分け入って行こうとする道は、とても暗く細いうえに、蔦や、楓が茂り、何となく心細く、思いがけなくつらい目に遭うことだと思っていると、修行者が（この男たちに）出会った。「このような道に、どうしていらっしゃるのですか。」と言う修行者を見ると、（都で）見知った人であったよ。都に、あの恋しい人のお手もとにと思って、手紙を書いて（修行者に）言づけた。

駿河なる…私は駿河の国にある宇津の山に着いたが、「うつ」と名の付く現にも夢にもあなたに逢わないことだなあ（もうあなたは私のことは思っていてくれないのだろうか）。

富士山を見ると、五月の末に、雪がとても白く降り積もっている。

時知らぬ…時節をわきまえない山は富士山だ。いったい今をいつと思って、あんなに鹿の子まだらに雪が降り積もっているのだろう。

その山は、都でたとえるならば、比叡山を二十ほど積み上げたくらいの高さで、形は塩尻のようであった。

さらにどんどん進んで行って、武蔵の国と下総の国との間に（来ると）、とても大きな川がある。それを隅田川という。その川のほとりに集まって腰を下ろして、（都を旅立ってからの日数・行程を）思いやると、途方もなく遠くまでやって来たものだなあ、と互いに嘆き合っていると、渡し守が、「早く舟に乗れ。日も暮れてしまう。」と言うので、（舟に）乗って（川を）渡ろうとするのだが、皆は何となく悲しくて、（それは）都に恋しく思う人がいないわけでもない（からであった）。ちょうどそのとき、白い鳥で、嘴と脚とが赤い、鴫の大きさであ

る鳥が、水の上に動き回って魚を食っている。都では見かけない鳥であるので、皆見て分からない。渡し守に聞くと、「これが都鳥だよ。」と言うのを聞いて、

名にし負はば…都鳥という名にふさわしいのならば、さあ尋ねてみよう、都鳥よ。私が恋しいと思う人は無事でいるかどうかと。

と詠んだので、舟の中の人は皆泣いてしまった。